

竜の口

一

「こまつたなあ」

新善光寺の道教がいった。

「貴僧の口からこまつたなぞといわれては、こつちが本当にこまるよ。そんな弱口をきいては、こまる。今度こそ、日蓮坊を、本当にへこまさなければならぬ時だぞ」

こういつたのは、光明寺の良忠である。

この二人は、今日、極楽寺の良観の見舞いを兼ねて、次の日蓮坊退治の方策をたてにきたのであった。良観を中心に、極楽寺の書院で座談会の最中であつた。

なにしろ、雨ふり上人、雨をふらせること二十余度、自由自在に雨をふらせてみせるといふ評判の良観が、今度ばかりは、見事に一敗地にまみれたのであるから、鎌倉中の評判は実に大変な

ものであった。

鎌倉中の念仏門徒の意気消沈の態ときたら、それこそ話の外であった。ほっておいたならば、だまっけていても、南無妙法蓮華経と唱えだすかもわからないという始末である。あれ程靈仙崎一山を狂気の場合にして、南無阿弥陀仏と唱えても一滴の雨もふらなかつたのが、南無妙法蓮華経と唱えたら、さっそくにふり出したのだから、法の勝劣は論ずる余地がないのである。

念仏門徒が、よほど思いきった手を打たねば、みんな、日蓮聖人に門徒をとられてしまうことは明らかである。

そこで、念仏門徒の側から、聖人の側に放つたのは、いわゆるデマ戦術であった。

今鎌倉で生き仏か、地藏尊者かといわれる良観さまが、雨を祈って、なぜ、雨がふらなかつたかという、それは日蓮坊主が、邪法をもって、ふるべき雨を、とめてしまったからである。

昔、お釈迦さまは前世で一角仙人といわれた時に、竜神を滝壺に封じ込んでしまつて、雨をふらせなかつたということがあるが、日蓮坊主は、その邪法をつかつたのであろう。一角仙人は、美人の誘惑にまけて通力を失い、終に雨がふつてしまったといわれるが、日蓮の方では、念仏のまわし者が、松葉谷にまぎれこんではならないと、兵器を庵室に積み重ね、無頼の徒をあつめて、題目講だといいながら、警戒はおさおさ怠りがなかつたそうだ。これでは、念仏側にも、日蓮法師を誘惑するくらいは鎌倉一の美女がおつたつて、とうてい松葉谷に近づくことは、思いもよら

ない。哀れ良観上人さまは、日蓮法師の邪法にひっかかって、雨がふらなかつたのだ。お気の毒さまだ。お釈迦さまも、ダイバダッタという悪人になやまされたのだから仕方があるまい。

といったような噂が、鎌倉中にとんで、念仏の側はおさまったようにみえたが、これだけのデマ戦術では、長く念仏門徒を押えておくことは不可能であるとして、良観とごく親しい光明寺の良忠と新首光寺の道教が、実は聖人を徹底的にやつつけてしまおう方策を、今日はたてにきたのである。

「われわれがそろって行なつた一昨年の変成男子の御祈禱はまったく見事に破れて、執権職時宗公に、鎌倉中の僧侶が面目を失い、御祈禱の総大将となられた鎌倉八幡宮の別当職、隆弁僧正はそれを恥じて、京都に帰ってしまった程の事件であつたが、これは、まあ、内々だつたから、今度のように鎌倉中に知れわたらなかつたが……」

「そうさ、今度のは雨だつたから、ふる、ふらんは、三歳の児童にもわかることだから始末が悪い。このままほうっておくわけにはいくまい」

良忠と道教との話をきいておつた良観は、

「では、貴僧たちはどうしようというのかなあ、勝敗は時の運というから、拙僧は今度のことにはあつさり負けたとみとめる。ただし、祈雨のことは、今度が始めてではない。すでに二十回も雨を祈つて、現に雨がふっているのだ。ふらないのは、今度が始めてで、たった一回である。この

次の機会には必ず雨をふらせてみせるから、それまで、まてばよいと思うのだがどうじゃ」

「それは手ぬるい。そんなことをしていたんでは、鎌倉中に南無阿弥陀仏を唱えるものがなくなつてしまふ」

「実は……」

良忠は膝をのり出すようにして、良観にいった。

「それで、もうすこしたつと、この席に行敏殿がくることになっています」

「いかなる用で……」

良観が不審な顔を見ると、良忠と道教とは、顔を見合わせてにつこり笑つて、良忠がいった。

「かの日蓮法師は、われらの顔を見ると、いつも問答、問答としつこくいうのが常です」

「そうです。立正安国論を鎌倉殿中に献上して、それが理由で、伊豆の伊東に三か年も流されたのにもかかわらず、まだ辻にたつて、国難来たる、諸宗との問答を望むと、常日頃申ししております」

「それを利用するのはです。逆手です。こつちから、日蓮に問答を申しこむのです」

「それはたいしたことず。しかし、誰がそれをやりますか」

良観は問うた。

「扇が谷の浄光明寺の住職、行敏殿が、それをやります」

「私のために、行敏殿が、日蓮法師と問答をしてくれることを承知してくれたのですか。それはありがたい。行敏殿ならば、真言宗と念仏と禅宗との兼学道場の住職、これは本当にうってつけの御仁だ。日蓮が常にいう、念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊を破折できるのは一人行敏殿をおいてほかになかるう」

「さよう」

「さよう」

道教と良忠は、声を合せてうなずいたが、良忠は、少し下卑な口調でこういった。

「そして、万が一にも行敏が負けたとしても、われわれには傷がつかぬという、うまい仕組みでございませう」

「とうとう」

「先ずこれは、戦さで申すならば、斥候というところでございまして、日蓮が学識をためさればなりません。それには、あの行敏が一番よろしうございます。行敏は一寸トップピセイのところがあります、そこが、われら二人の思う壺でございませうので……」

「由来、問答などというものは、ひよんなどところで、勝ち負けのきまるものでございます。学識ばかりにはよりません。当意即妙がきかねばなんにもなりません。口数が多い方が勝つかというと、あまり長々しゃべったために、敵に攻撃の材料を与えて、つまってしまつたなどの例もあり

ます。さりとて、黙っておれば、知らねえんだらうとあっさりきめつけられて、これも負けでございませう。この辺のコツというのがなかなかむずかしいもので、行敏ならばそれをやれると思
います」

道教の言葉につづけて、良忠はニツタリと笑いながら、

「こつちに運があれば、行敏のトツピセイが幸いして、彼の日蓮坊をうまくまごつかせることができます。あるいは日蓮程の人物ならば、行敏の人物をみぬいて、問答するのを嫌うかもわかりませんが、それがこつちの作戦で、日蓮が黙ったならば、もはや勝つたと宣言して退場してしまえばよいのです、それで終りです」

「そうはいくまいぞ」

「いかなければ、日蓮の学識を十分きけるように行敏にしむけさせ、そのいい分をそれこそ、われら鎌倉中の僧達が十分研究して、日蓮に当たります。行敏は日蓮に負けたとしても、あのトツピセイの人物が得をして、そうわれわれの恥にはなりません。行敏の恥にこそなれ……」

「行敏さまが、只今玄関に到着しました」障子ごしに所化から声をかけられて

「ええつ」と三人は驚いた。

×

×

×

「まだ、お逢いしたことはありませんが、事のついでをもつて思うところを申し述べるのは、世の常ですから失礼いたします。そもそも、噂の通りならば、所立の義はもつとも不審です。

(一) 法華の前に説いた一切の諸経は、皆これ妄語にして、成仏の法ではない。

(二) 大小の戒律は世間をだますもので、人をして悪道におとさす法である。

(三) 念仏は無間地獄の業なり。

(四) 禪宗は天魔の説で、これを修行するものは、悪見を増長する。

以上の四か条が、もし事実ならば、仏法の怨敵です。よつて、対面をとげ、悪見を破らんと欲す。将又その義なくんば、いかでか、悪名を痛ませられざらんや。是非につけて、委しく示し賜わるべき也。恐々謹言。

文永八年七月八日

僧行敏花押

日蓮阿闍梨御房

と、行敏は読み終ると、座中の三人の僧を見まわして、ふわふわつ、きいきいと、異様な笑い声をするのであつた。あつけにとられて、異様な笑い声をきいておつたが、元来がトツピな人柄なので、笑い声には少し我慢をしていたが、良忠がいった。

「それだけか。馬鹿に短いではないか」

「貴僧は、喧嘩の果し状をみたことがあるか、短いもの程よいのだ。俺はこれでも、長すぎると思つておるが、相手が四箇の格言といつておるから、四つに質問をくぎつたので、それで長くなつた。これが、日蓮法師の、鎌倉にきてからの、今年で十八年来の御題目だ。これをだ、対面をとげ悪見を破らんと欲すると、やつたのだ。いいか、十八年間も、鎌倉の七大寺の住職や大小さまの僧達が、よくまあ、黙つていたものじゃ。ふぬけか、たわけか、なんのために念仏を唱えていたのか、慨嘆、悲憤、慷慨リンリンだ。ふわふわつキャキャツ……」

なかなか面白そうなお人とみえる。行敏は、笑いがおさまると、言葉を更につづけた。

「良観上人殿、今を時めく鎌倉の日蓮法師を相手にして、一生一代の問答をやるときまつた、この行敏、本日は、言葉をかざらず、本当のことを失札ながら申し上げてみよう。行敏が、この問答を引き受けたのも、一重に、貴僧、良観阿開梨のためですぞ。したがつて、本日は卒直に申そう。かれ日蓮方では、貴僧のことをなんといつて評判しておるか、恐らくご存知あるまい。由来側近などというものは、悪い噂はご本人にきかせぬもの。これも、一重に、この行敏が、日蓮相手の問答という、一大役柄を喜んで引き受けた手前、腹では、泣き泣き申し上げておるのです。

ふわふわキャツキャツググツ……はあはあつ。良観上人さま。日蓮坊は、貴公のことをこう申しておりますぞ。

六月十八日より七月四日まで、良観が雨の祈りをしたが、日蓮の法力にささえられて雨はふら

ず、汗をながしたり、ふるものは涙だけとは、しかも、逆風はふきまくって、祈雨は続行不能となった。一丈の堀をこえぬものが、なんで、十丈二十丈の堀を越えることが出来ようか。二百五十戒を持ったという人びとが千人もあつまって祈ったが、雨はふらない上に、大風がふきまくった始末。南無阿弥陀仏では、極樂往生ができないという、これが証拠だ。極樂寺の坂を通れば、良觀坊の泣き声がきこえるというのが、今、鎌倉中での大評判だとはやし立てている。良觀上人が本当に、後生を恐れるならば、日蓮との約束を守って、いそぎ、いそぎ、松葉谷にきたまい。雨をふらせる法と、仏になるべき道を教えて進ぜようと。使者を出していわせたところ、良觀坊は涙を流し、弟子、檀那達は、声をおしまずくやしがつたこと。くやしがつたこと。とうとう雨はふらなかつたのだから、良觀坊は恥を知つたならば、跡をくらまして、山林にでものがれたらばよいのに、まだまだ極樂寺にすんでおるそうな……」

「行敏殿、行敏殿。良觀御房の前ですぞ。いっていいことと悪いことがある、少しは謹みなさい」

「キヤツキヤツふわふわつ……」

「なにが、そんなにおかしい。拙僧は、昔から、貴僧の変てこなその笑い声をきくと、むしずがはしるのだ、つつしみなさい」

「ああたまらん。この行敏は、笑っていけないといわれたので、今がまんしてるところだ。泣く

のをがまんするより、笑うのをこらえる方が余程つらいものだと思つた。だがなあ、良忠上人、行敏は、日蓮坊という当代の荒法師を相手にして、問答をやってくれといわれて頼まれたのだぞ。敵を知り己れを知れば、百戦まったからずじや、日蓮法師が、どんなことをいつておるかを知らないでは、問答にも、ならないではないか。だから、ありのまま申したまでだ。そんなに聞くのがいやなら、これで、憎まれ口はやめよう。だが、ここにどうしても、やつてもらわねばならぬこと、良観上人に頼まねばならないことがある」

「それはなんだ」

「ほかでもない。裏面工作、裏面工作」

「と、いうと」

「行敏が、たとえ日蓮法師との問答に負けても、日蓮法師をやつつける絶対の手があるのだ。それを良観上人に先に頼んでおくのだ。それはなあ、御執権職・時宗殿の御生母は極楽寺を建立された重時さまの娘だ。ここだ。これが、実は問答するより早や勝ちの手。いいかなあ。問答するよりこのツボをぐつと、良観上人が、その口でおさえてくだされば、万事がすんでしまうこと。鎌倉諸宗の僧侶があつまつて、時宗さまに男子御出生を祈る変成男子の祈禱をやれば、それをかぎつけた日蓮坊が、邪法の通力によってさまたげました。このことは、証拠がないので、今まで、申し上げられなかったが、今度の祈雨のことによって、日蓮坊の邪法が、ばくろいたしまし

た。良観上人が二十度もふらせた雨の祈りの法力を邪魔して、とうとう二た七日の間、雨がふらなかつたのでございます。日蓮の立義が邪法たる証拠がはつきりしておるし、日蓮も自らわが法力をもつて、良観上人の邪魔をしたと申しておるのでございますから、今度は証拠がございませぬから、畏れながら訴え出ました。時頼さまの後家尼さま、時宗さまも頭があがらぬご自分のご生母、しかも、この極楽寺のかつての大檀那のおつれ合いのお方。なんで、良観上人さまの願い出をきかぬでおくものか。日蓮を島に再び流すのも、ばつさりやつてしまうのも、実は、良観上人さまのお口一つでございませぬ。かえつて、良観上人さま、かくかくの奴ですが、ふびんでなりませぬから、命ごいを申し上げますと、先きに申し上げた方が、効果はきめんかもわかりませぬぞ。キヤキヤツキヤキヤツ、ふわふわつつつつ……」

行敏は、ここぞとばかり、異様な笑い声を思いきりやつてみせたが、良忠も道教も今度は、怒りもしなかつた。実に、行敏のいった通りなのである。だがこれは、自分たち二人だけが、秘かに相談して。行敏が、日蓮坊に問答で負けたら、良観上人に、申し出ようと思つていたところであつたのだ。良忠と道教の二人は、行敏を利用しようとしたのが、かえつて行敏にまんまと裏をかかれたことになりそうであつた。

さて、七月八日の日付になる行敏署名の聖人宛の手紙は、五日後の七月十三日に、聖人から御返事があつた。

「条々御不審のこと。私の問答は、事行い難く候か。然れば、上奏をへられ、仰せ下さるるの趣きに随つて、是非を糾明せらるべく候か、此の如く仰せを蒙り候条、もつとも庶幾する所に候、恐々謹言。」

七月十三日

日蓮花押

行敏御房 御返事

「(全集一七九ページ)

とあつた。

この書状に接した良観をはじめ、道教、良忠、行敏等々の諸僧は、ウソといて唸つてしまつた。陥し入れようと計つたのに、この返事では、陥しいられたのは、かえつて良観の側であつたのだ。

聖人は、はっきりといつた。私の問答はしません、公の場所で問答をしましょう。鎌倉幕府に上奏して、公場で堂々とやりましょう。日蓮の願うところですよといふのである。

一一

行敏の問答申込みに対して、聖人から返書がきたが、私の問答はいたしません、公の問答ならいたしましょう。当方の願うところであり、とのことであつたことは前述した。

そこで行敏は、裏面工作が充分に出来て、後顧のうれいなしとみてか、鎌倉間註所に、文章をもつて願ひ出たのである。

その願ひ出の文章をここに掲載する。ただし口語体に改めてのせることにする。

一 僧、行敏謹んで言上します。

早く日蓮と対決して、邪見をくじき正義を興隆したいと存じます。

副進す。

一 通 行敏書状の案

一 通 日蓮の返状

右、八万四千の仏の教は、成仏の法でないものはありません。大乘、小乗、顕教、密教の法も仏の悟りを得るの法でないものはありません。たとえば医師は病によつて薬を調合し、石屋が大小長短の石材をもつて、物をこしらえるようなものであります。一のみを是として、諸々のものを非とする理由はありません。しかるに、日蓮は、法華經一部のみに偏して、諸々の大乘を悪口いたします。日蓮の義に従えば、法華經を説いた以前の諸経は、皆これ嘘であつて、衆生の成仏の法ではない。念仏は無間地獄行きである。禅宗は天魔の説、諸々の戒律は、世間をだまくらかす法であると断言しております。よつて、愚夫愚婦どもは、日蓮の言を信受しまして、年来拜んでおつた本尊や、阿弥陀、観音等の仏像を焼いたり、水に流したり、あるいは、長年修行した念

仏や持戒を悪口いたします。それどころか、法華守護と号して、兵器を自分の草庵にたくわえ、無頼の徒を集めております。これら所行は、去る弘長元年の伊豆伊東に流罪の日にすでに露顕したことでありまして、その当時が一番盛んでありました。日蓮はその後、お上の哀憐をもって、流罪免許になったのですから、すべからく前非をくいておるべきでありますのに、さはなくて邪見の思いを抱くこと、ますます高く、悪行の計画はますます盛んであります。すなわち近日旱魃のことで、諸寺の住職が祈雨した時、日蓮は弟子を良観上人のところにつかわして、再三申して云く、「今御祈禱人と称して、天台真言禅律等の諸僧が、雨の御祈禱をしておるが、神慮にかなうことがない。今蒙古が日本に來襲するということも、東北の辺において蝦夷が乱を起したということも、すべて、禅宗律宗念仏宗の繁昌の結果である。故に、建長寺、極樂寺、多宝寺、大仏殿、長樂寺、浄光明寺等の諸々の寺を焼き払い、禅宗念仏僧等の、諸宗の僧侶の頸を斬つて、由比浜にさらし首にしなればならない。かくのごとく邪宗を戒めたならば、早魃に必ず雨がふり、徳風も四海になびいて、敵国が、この国を伺うようなこともなくなる」と、日蓮は揚言しております。しかも日蓮の弟子や信者は鎌倉町中の方々の風呂場や神社仏閣、見物人の参集するところにおいて、諸宗を邪宗よばわりし、折状を口にすること教えることができせん。かえりみるに、日蓮が焼くべしと叫ぶ寺々は、かたじけなくも、関東鎮護の靈場であり、日蓮が斬るべしと願う僧侶は、鎌倉当代きつての英僧であり、戒香は身にかおり、徳風は人を化してあまねしと

いふべき人々であります。寺を焼き僧を斬れと願う日蓮の義については、鎌倉の町民すら愁憤しております。お上においても、痛心至極のことと存じます。昔マカダイバは宗義上から、聖僧を殺さんと申しましたが、寺を焼くとは申しておらず、逆臣守屋が、仏法を一時に滅したことが歴史上ありますが、未だ必ずしも、僧の頸を斬るとはいっておりません。日蓮の悪逆はこう考えてくると、歴史上にもないことで、今後も、これに類する人物が出現しようとは思えません。ただ、日蓮一人の悪見のみではなく、多くの人びとを迷わせておることが重大問題であります。

ここにおいて、行敏は、誠に悲哀にたえず、七月八日、日蓮が許に状を遣わして問うて云く、「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊との四か条のこと、もし実ならば仏法の怨敵である、封破せんとほつす云々」日蓮はこれに報じて云く、「私の問答は事、行いがたきか、上奏をへられて是非を明むべし云々」とありました。よつて、仏法興隆のため、かつまた衆生の利益のため、日蓮との対決をご心配下さい。その席上において、日蓮の悪義を停止してしまえば、仏法は繁盛して、とこしえに公家、武家の安全を祈り、人民は今後、ますます仁徳をこうむるのみであります。以上謹んで言上します」

行敏の訴状だけを読めば、なる程、そんなものかと思うかも知からない。近頃はあまりみられなくなつたが、さりとて後をたつたわけではない、日蓮正宗創価学会に対する批難攻撃みたいな

もので、それだけを読むと、なんとけしからん宗教があるものだと思うのは、今も昔も変わりがないのである。

行敏の訴状を受けとった幕府では、当時の慣例に従って、これを聖人の許に下してその反論をうながした。

聖人は求めに応じて、論状一通をしたためて幕府に上進した。遺文にある、「行敏訴状御会通」(全集一八〇ページ)がそれである。前状に従って、その論状を口語文でのべがきにするが、聖人の靈筆を汚すことを深く謝するものである。

「当世日本第一の持戒の僧良観聖人、並びに法然上人の孫弟子念阿弥陀仏、道阿弥陀仏等の聖人たちが、日蓮を訴訟する状に、

「早く日蓮と対決して邪見をくじき、正義を興隆したいと存じます」と云々。日蓮も、邪見をくじいて、正義を興隆することは、一眼の亀の浮木の穴に入るがごとき心持で、幸甚幸甚と存じます。

彼の状によりますと、「右八万四千の仏の教は、成仏の法でないものではありません。一のみを是として、諸々のものを非とする理由はありません」云々とありますが、道綽禪師(真宗七祖の第四祖、唐、玄中寺の人)の云く、当今は末法五濁の悪世である。ただ、浄土の一門のみ仏になるべき道である。善導和尚(唐光明寺の善導、仏名を唱えて、口に光明を出す云々)は千中無一

というて、五種正行の外の雑修雜行によつて、極樂往生することは、千人の中に一人もないとい
うております。法然上人は、捨閉閣扱というし、法華真言、総じて一代の大乗六百三十七部二千
八百八十三卷一切の諸仏、菩薩、及び諸の世天を捨てよ、閉じよ、やめよ、なげうてと、いわれ
ておるのは有名な言葉であります。しかるに行敏は、日蓮を訴状するの文中に、一のみを是とし
て、諸々のものを非とするのは誇法であるといつておりますが、これでは前述の三人の本師の立
義に相違しております。これでは外道と呼ばれても仕方のないものでありますが、あるいは、良
觀上人が行敏の立義に賛成しておるのでありましょうか、これはまったく正義とは受けとれませ
ん。

また行敏の訴状には、日蓮は法華經一部のみに偏して諸々の大乘を悪口いたしますとありますが、無量義經には、四十余年には未だ真実を顕わさず。法華經には、かならず、まさに真実を説
くべし。また云く宣示し顯説す。多宝仏は証明を加えて云く（妙法蓮華經は）皆これ真実なり。
十方の諸仏は舌相梵天に至るといふ云々。己今当の三説（法華經以外の經々）を誹誇して、法華一
部を讚嘆するのは積尊の金言であり、諸仏の通例であつて、決して日蓮が私義ではありません。
その上、この難は延暦、大同、弘仁のころ、南都の法相宗の徳一大師が伝教大師に、難じたところ
でありまして、その難は、伝教大師によつて破折されて、法華宗が建立せられたのでありま
す。

「日蓮の義に従えば、法華経を説いた以前の諸経は、皆これ嘘の説である云々」と、訴状にありますが、これまた日蓮が私言ではありません。無量義経に云く「未だ真実を顕わさず、未顕真実とは嘘の異名であります」法華経第二に曰く「むしろ虚妄ありや否や」第六に云く「この良医の虚妄の咎を説くや否や云々」涅槃経に云く「如来は虚妄の説なしといえども、もし衆生、虚妄の説によると知れば云々」天台の云く「即ちこれ如来綺語（十悪の一、いつわり飾る言葉）のことばなり云々」四十余年の経々を妄語と称することは、日蓮が私言ではありません。

また云く「念仏は無間地獄行きである」と日蓮がいうとありますが、法華経第一に云く「我れ即ち極貧に墮せん、此の事はさだめて不可なり、云々」第二に曰く「その人命終してアビ地獄に入らんと云々」釈尊さえ、ただ、観経念仏等の四十余年の経々を説いて、法華経を演説せずんば、三悪道をのがれ難し云々、とあります。いわんや、末代の凡夫たるものが、一生の間ただ自ら念仏の一行に留まり、法華経を信じなければ、無間地獄におちることは当然であります。たとえ、民と子とが、王と親とに随わないようなものであります。しかるに、道綽、善導、法然上人等の、念仏を修行する連中は、法華経の名字をあげて、念仏に対当させ、あまつさえ勝劣難易を論じては、未有一人得者、十即十生、百即百生、千中無一等という、経文からてらしてみても、無間地獄の火中に入ることは明々であります。

「禅宗は天魔の説云々」とありますが、これもまた日蓮の私言ではありません。禅宗の人びとは

教外別伝といっております。しかるに、仏の遺言に「我が経の外に、正法ありといわば、天魔の説なり」とあります。故に禪宗の教外別伝は、この遺言によれば、まさに天魔の説であります。

「諸々の戒律は、世間をだまからかすの法である云々」と訴状にいつておりますが、日蓮は次のごとく断言します。小乗戒は、仏様は御自分の時代に無益なりと破しております。その上、インドには三つの寺がありまして、一向小乗寺、一向大乘寺、大小兼行寺であります。一向小乗と一向大乘とは水火のごとき相違であります。日本国では、去ぬる聖武皇帝と孝謙天皇との御宇に、小乗の戒壇を三か所に建立しました。その後、桓武天皇の御宇に、伝教大師は、これを責め破りました。そのいうところは、小乗戒は末代の人びとには無益であるということです。護命、景深等の南都の僧侶は、その諍論に負けるのみならず、六宗の高僧達は、仏教大師に詫び状をささげて、大師に帰依し円頓（天台宗の戒法で小乗、律宗とはことなる）の戒体を伝受す云々とあり、その状はまだ朽ち果ててはおらないから、自ら開いてみるがよい。しかるに良観上人は、当世日本国の小乗戒は昔のとがを存せずというのでありますが、認識錯誤もはなはだしい。次ぎに「年来の本尊たる弥陀観音の像を火に入れ水に流す云々」のこと、このことはたしかなる証人を出して申されたい。もし証拠がなければ、良観上人等が、自ら本尊を取り出して、火に入れ、水に流して、その科を日蓮に負わせようとするのでありませんか。委細は、これを糾明する時に明瞭になることでしょう。ただしこのことのお尋ねのない時は、その重罪は、良観上人にゆずり渡し

ます。良観上人は常に二百五十戒を持つと誇称されておるが、それを破る因縁はこの大妄語にしくものはありません。無間大地獄に墮ちる人は眼前にあります。

また云く「草庵に無頼の徒を集めております」とのこと、法華經に云く或有阿練若等云々、妙楽云く、東春に云く、輔正記に云く

………何々に云くといつて、文章を引用してないのは、聖人の深慮の計いである。文を出せば、良観側において再び盗用するであろうから、態と文を引かないで、公場対決の時に、さあつと、引用しようというのである。まだこの下においても、引用文のないのがあるが、それも同断である。(筆者註)

これらの経釈等をもって、当世の日本国に照らしみると、行敏があげる、建長寺、寿福寺、極楽寺、多宝寺、大仏殿、長楽寺、浄光明寺等々の寺々は、妙楽大師のさすところの第三最もはなはだしき悪所であります。東春に云く「即ち是れ出家の処に一切の悪人を撰す」とあり、涅槃經に云く、天台云く、章安云く、妙楽の云く、云々とあります法華經守護の為の弓箭兵杖は仏法に定まつた法であることは、国王守護のために、刀杖を集めるようなものであります。

ただし良観上人等の弘通するところの法は、日蓮が難問をのがれたいので、露頭しては大変と、自分の邪義をかくさんがために、諸国の守護地頭雑人等と相語つて、日蓮とその弟子達は、阿弥陀仏を火に入れ水に流す、汝等が大怨敵は日蓮なり、頸を切れ、所領を追い出せ等と勸進す

るがために、日蓮は身に疵をこうむり、弟子達を殺害に及ぶこと数百人であります。これは偏に、良観、念阿、道阿等の上人の大妄語より出でました。

心あらん人びとは、驚ぐべし、怖るべし」

以下、聖人の論状は、寺を焼き、僧を斬ることが、前代未聞というので、支那、日本における歴史的事実をあげておられるのであるが、それにもまして、極悪なのはこれら、インド、支那、日本の仏法破滅の大悪人よりも、末代における偽聖人が正法を滅失せんことまことにはなほだしいと、結論されておるのである。

聖人の訴状は提出された。今はただ、幕府の裁断をまつのみであった。

三

文永八年九月十日、問註所に出頭せよとの召状が、聖人の草庵にきた。

聖人は恐れることもかく、その日間註所に出頭した。

問註所とは、いうまでもなく、訴訟の裁断を下すところである。行敏が聖人を訴え、聖人は行敏の訴状に反駁を与えた。当時の様式に従えば、これを三回くりかえすということになっている。

三回くりかえして、なお是非曲直が明白にならなければ、訴人を召喚して、仔細に問答をすること二回に及び、それが終結して、引付衆において両者を対決させ、引付衆はその陳述文を記録してこれを評定所にまわすのである。評定所では、この陳述文を議案として、引付衆を始め関係者が相集つて評定して、判決を下して、勝訴者に裁許状が引付から下るといふことになつてゐる。この判決に不服の時は、再び引付頭に再審をもとめることが出来る。

引付というのは記録係の別名だが、これがその上の評定衆を輔佐して裁判をすすめるのである。以上のことを読むと、裁判は実に公平だという印象を受けるが、それは表面上のことであつて、事実はこれと異なるものがある。北条時頼は執権職の在任が十年であつたが、この間に、北条氏に対抗する三浦氏を滅亡させて、その専制力をましてきたので、幕府の公式の評定衆とは別に、私邸の秘密会議がたびたび開催されていた。時頼の子時宗になると、その傾向は激しくなり、蒙古来襲という困難を理由にして、評定衆の会議より、私邸の秘密会議が多くなつたといわれておる。

さて問註所での取り調べは、執権の家司平左衛門尉頼綱と評定衆の面々であるが、もちろん左衛門尉頼綱が、評定衆の人びとには、口一つきかさず、自分自分の取調べであつた。

「本日の取り調べは、鎌倉幕府の御政令にもそむくかと思ひますが、いかがでありますようか。何故、この日蓮を訴えた僧行敏の出席がないのでありますでしょうか、これ一つ。三度び文書の往復

があつて、その後対決とは、幕府御政令にあるところでありませんが、それもなく只今取り調べのようではありますが、これも日蓮不審至極でございます」

「だまれ、日蓮。汝の罪はもはやきまつておるのじや」

「一回の御取り調べもなくして処断とは」

「だから、只今、取り調べておるではないか。この、お上の慈悲がわがらぬか、それとも、日蓮、只今より、念仏の悪口を申しませんとでもいうのか。それならば、格別の御慈悲がないでもないぞ、いかがじゃ」

「……………」

「返答がないのは、不承知とみた。では、きこう。よいか、はっきりと返答をせよ。……日蓮を処断するは、この一条にあると思えばよい。もつたいなくも、御三代執権職時頼さまを地獄に墮ちたと申しておる由。また時頼さまの伯父さまたる重時さまも地獄におちておると申しておる由であるが、しかとさようか……御返答あれ……」

左衛門尉頼綱は、聖人を睨みつけるのであつた。

「そのことでございますか。それは行敏の訴状に少し違ふところがございます」

「それはいかなることであるか」

「時頼さまが、地獄におちていると申しましたことは、亡くたつた今日になって申しておるので

はございません」

「ええつ、なんということを申す……」

聖人は静かに言葉をつづけられた。

「頼綱殿は、日蓮が文応元年七月十六日、今を去る十三年前に立正安国論を、故北条時頼殿に献上したことを、父の盛時殿よりお話を受け賜わらなかつたとみえますなあ。その安国論の中には、はつきりと「もし執心ひるがえさず、曲意なお存せば、早く有為の郷を辞して、必ず無間の獄に墮せん」と、すでに述べております。すなわち、念仏無間の法門は時頼殿御在生の時代に申し述べておきました。たとえ、御執権職なりと、法華経を信ぜざれば墮地獄はまぬがれぬところでございます」

「なんと申す。それを正気で申すのか、時頼さまは鎌倉に大仏殿をこしらえ、建長寺をこしらえたお方、重時さまも極楽寺を建立されたお方ではないか、すべて万民の等しく仰ぎ奉る御方々ではないか、なにを血迷つて地獄に墮ちているなぞというのか、経文にさようなことがあるのか。みんな御手前が勝手に申しておることであろうか……」

「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊とは、これ、日蓮が私言ではなく、法華経の精神たることはすでに行敏の訴状を破折したる文に分明でありますから、とくと、日蓮の弁駁書をご覧下されたい。日蓮は念仏を唱える人に向つては、念仏は地獄におちる法と申しております。真言を尊

む人には、真言は国を亡ぼす悪法と申しております。国主は禅宗を尊む、日蓮は禅は天魔の説と申しております。律は国師というが故に、日蓮は律は国賊と申しております。叫び続けて、本年すでに十八年になります。ただいままで、問註所において、この議についてのお取り調べは、今度が始めてでございます。身にあまる光榮と申しても、さしつかえがありませんが、日蓮を訴えたる、相手方の僧行敏の出席がないことは、日蓮まことに遺憾至極でございます」

「もはや行敏の出席は不要なことで、この頼綱が思っておる。日蓮殿……貴殿は、よもや、建長寺、寿福寺、長樂寺、極樂寺、大仏寺等々を焼き払えなぞとは申すまいな」

「申しました」

聖人はきつぱりといった。

呻ったのは、頼綱一人ではない。評定衆の人々も、聖人の言葉には思わず、顔を見合わせて呻るだけであった。

聖人はつづけていった。

「今鎌倉の七大寺は、日蓮からみますならばいざれもみな墮地獄の根源であります。これを焼くになんの躊躇がいらしましょうか。この七大寺の僧侶の頸を由比が浜にきつて、墮地獄の根源をふせぐべきであります。詮ずるところ、この日蓮の強言は、すべて、この日本国未曾有の時に当たつて、わが国を思うが故にほとばしる言葉であります。天下泰平を保たんと思うのでありますれ

ば、どうか、この場に、鎌倉七大寺の良観、道隆、念阿、道阿等々の僧侶を呼んで、日蓮と対決さすべきであります。さはなくて、理不尽にも日蓮を罰するようなことがあるならば、仏の御使を用いぬことになりませぬ。おそらく、梵天、帝釈、日月、四天等々の法華経の守護神は、日蓮に加護をたれて、遠流死罪の後には、百日、一年、三年、七年の内には、自界叛逆の難といつて、北条氏一門に同志討ちの戦さが起り、その後には、他国侵逼の難という西の方蒙古の国が、この国を攻めるようになりますぞ。その時に、後悔してもただ詮ないこと、よくお考えをいただきたい」

「無礼つ無礼つ、無礼つ、なにを血迷つて叫ぶか。狂気の沙汰とは、汝、日蓮のことをさすか、きく耳、もたぬ。さがれ、さがれ」

と平左衛門尉頼綱は叫ぶだけであつた。聖人は、この時の頼綱の怒り方を平の清盛が狂つたようであつたと、種々御振舞御書にのせておられる。

北条時頼、北条重時等が地獄におちているということ、聖人が問註所で申し述べたぐらいで、聖人の強言に驚いてはならないことを申し述べておく。聖人は、妙法比丘尼御返事（弘安元年の筆）では

「人王八十二代隠岐の法皇と申せし王ならびに佐渡の院等は、我が相伝の家人にも及ばざりし、相州鎌倉の義時と申せし人に、代をとられさせ給いしのみならず、島々にはなたれて嘆かせ給い

しが、終には、彼の島々にしてかくれさせ給いぬ。魂は悪靈となりて、地獄に墮ち候いぬ。その召しつかわれし大臣以下は、或は頭をはねられ、或は水火に入り、その妻子等は、或は思い死に死に、或は民の妻となりて、今五十余年、その外の子孫は民のごとし、これ偏へに、真言と念仏等をもてなして、法華經、釈迦仏の大怨敵となりし故に、天照大神、正八幡等の天神地祇、十方の三宝にすてられ奉りて、現身には我が所従等にせめられ後生には地獄におち候ぬ」（全集一四二ページ）

と申されておることを忘れてはならない。

何故問註所には、聖人だけの喚問で、これを訴えた行敏等の喚問はなかつたのであろうか。聖人は種々御振舞御書には

「さりし程に、念仏者、持斉（律宗）真言師等、自分の智は及ばず、訴状も叶わざれば、上臈尼御前たちにとりつきて、種々に構へ申す、故最明寺入道殿、極楽寺入道殿を、無間地獄に墮ちたりと申し、建長寺、寿福寺、極楽寺、長樂寺、大仏寺等を焼き払えと申し、道隆上人、良觀上人等を頸をはねよと申す、御評定になにとなくも、日蓮が罪禍まぬがれがたし、但し上件んのこと一定申すかと、召し出して尋ねられるべしとて召し出されぬ」（全集九一二ページ）

報恩抄には

「禅僧数百人、念仏者数千、真言師百千人或は奉行につき、或はキリ人につき、或はキリ女

房（権威の高い貴女、鎌倉幕府に縁故のある女性達）につき、或は後家尼御前等にういて、無尽の讒言をなせし程に、最後には天下第一の大事、日本国を失わんと呪咀する法師なり、故最明寺殿、極楽寺殿を無間地獄におちたりと申す法師なり、御尋ねあるまでもなし、但しゆゆ（いそいで）の意）に頸を召せ、弟子等をば又或は頸を切り、或は遠国に遣わし、或は牢に入れよと、尼御前達いからせ給ひしかば、そのまま行われけり」（全集三三二ページ）

妙法比丘尼御返事には

「極楽寺の生仏の良観上人、折紙をささげて上に訴え、建長寺の道隆聖人は、輿に乗りて奉行人にひざまづく、諸の五百戒尼御前等は、はくをつかいて伝奏をなす」（全集一四一六ページ）
（はくとは絹の事故贈物をつかつて云々の意である）

とあるのをみれば、いかに聖人をおとしいれようとしたかがわかるのである。

地獄に堕ちたといわれた、時頼の後家尼や重時の後家尼が、だまっていよう筈がない。時頼の後家尼は熱心な禅宗の信者であり、重時の後家尼は良観の信者である。当時の執権職時宗は建長寺道隆の弟子になっている。時宗の連署（執権職の補佐役）政村、評定衆の尾張前司時章、越後守実時、駿河守義政、越前前司時広、遠江守教時、陸奥守時村、等々は、良観の師匠たる叡尊から受戒した人ひとである。

（叡尊は弘長二年の三月八日鎌倉にきて、授戒せし者一万人といわれる）

これ等がよつてたかつて、聖人の処分をきめたのであるから、その結果はわかつておる。おそらく、その処分は、聖人が、種々御振舞御書に述懐されておることく

「一、日蓮の頬を斬るべし

二、然らずんば鎌倉追放

三、弟子檀那は領地を没収すべし

四、過激分子は斬首

五、島流し或は入牢

等々であつたに違いない。

松葉谷の草庵には、聖人をおとしいれようとする策略を秘かに伝える好意の人びともあつた。

問註所の執事太田康有は、三大秘法抄を聖人より賜つた太田乗明の弟である。この方面からも、聖人に、事態の容易ならざることが、伝えられたのである。

聖人は、松葉谷の草庵に弟子檀那を集めると、本日の取り調べの模様を伝えて、厳に今後を戒められた。

「各々方、日蓮の弟子と名乗る人々は、一人たりとも臆病であつてはなりませんぞ。親を思い、妻子を思い、所領を思うようなことはこの期に及んでは未練至極です。昔よりこのかた、親子のため、所領のため命をすてたものは大地微塵よりも多いが、法華経のためには、未だ一人も命を

すてた人はありません。法華經をわずかばかり行じて、この様な事態が生ずると、だいたい退転してやめてしまうものです。湯をわかしても、水を途中で入れれば再び湯は水となり、火打ち石を叩くに途中でやむれば火の出ないようなもの……。

各々方、思い切つて、今度、法華經に命をささげることは、石に金をかえ、糞と米とをかえるようなものです。

仏滅後二千二百二十余年の間、迦葉、阿難等、馬鳴、竜樹等、南岳、天台等、妙楽、伝教等だにも、未だ弘め給わぬ法華經の肝心、諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字を、末法の始めに、一閻浮提に弘まらせ給うべき瑞相に、今日蓮がさがけをしました。わが門流の人びとは、二陣三陣とつづいて、迦葉、阿難にもすぐれ、天台、伝教にもたち越えなければならぬ。わずかの小島の主たる北条氏などにおどろかさされて退転し、地獄におちて、閻魔王に責められたらばなんとするか。仏の御使いと名乗りながら、臆するとは卑怯のふるまいであると充分覚悟せねばなりませんぞ」

聖人は弟子檀那に覚悟を促すと、共にこの日蓮が一門が、只今遭遇することは、すでにその昔仏が記しおかれたことがあつて、わが身の光栄を感じねばならんと次のごとく教えるのであつた。

「仏は法華經、涅槃經、大集經等々に、わが滅後正像二千年をすぎて、末法の始めに、この法華

經の肝心、題目の五字ばかりを弘めるものが出現する。その時、悪王、悪比丘等、大地微塵よりも多く、大乘あるいは小乗の教をもつてこれに対抗するが、この題目の行者にせめられて、在家の檀那等々にはからつて、題目の行者をのしり、あるいは打ち、あるいは牢にいれ、あるいは所領を没収し、または流罪しまたは頸をはねるといふて、この題目の行者をおどかすのであるが、題目の行者は断じて退転なく法華經を弘むるので、仇なすところの国主は同志討ちをはじめて、餓鬼がわが子を食うごとくなり、結局は、他国よりこの国を攻められること必定である。これ等は、ひとえに、梵天、帝釈、日月、四天王等の、法華經の敵となつたる国を、他国より攻めさせて反省させるためなのである。わが身はすでに、法華經の經文である。弟子檀那は、如来に従う、地涌の菩薩であると覚悟せねばならない。臆することなかれ、すべては南無妙法蓮華經である……」

草庵を庄する聖人の御声は、実は末法本仏の梵音声であつたのである。

四

文永八年九月十二日。

その日の午前中のことである。

聖人は松葉谷の庵室にあつて、静かに、一書をしたためられていた。この夜、竜口法難という驚天動地の出来事が起り、長く世界史上に残る出来事となつたが、草庵にはその気配は少しもなく、木犀の花がかすかに匂い、早咲きの菊が垣根の許にさいて、庭には落ち松葉が、砂地の庭をかくす程にちりしいていた。

この朝、聖人がしたためた一書を、後年の人びとは、一昨日御書と呼んでおる。それは一昨日、すなわち、文永八年九月十日問註所における、聖人の検問者たる北条家の家司である、平左衛門尉頼綱にあてた書状で、一昨日、見参という言葉から始まつておるので一昨日御書となづけただのである。

——一昨日、問註所において見参し、対面を得たことは喜びであります。この世に生きておる人びとは、すべて後世のことを考えております。仏が世に出現するのは、衆生を救わんがためであります。さて日蓮は、僧侶となつていろいろ法門を研究し、諸仏はなにを目的としておられるかをさとり、迷界を出づるの主要を悟りました。それはすなわち、妙法蓮華経であります。この妙法蓮華経という一乗を信仰することによつて、インド、支那、日本が繁盛したことは、眼前の事実であります。これを疑う人は一人もない筈であります。

しかるに、現今の人びとば、法華経の正しい道にそむいて、法華経以外の邪教というよこしま

の道に迷っており。故に、聖人はこの日本国をすてさり、善神は怒りをなして、仁王経に説くところの七難がならび起つて、日本の周辺がおだやかではないのであります。

現在では、日本の政権はすべて北条家に帰してしまい、人びとはこの関東の気風を尊んでおります。日蓮は、とりわけて生をこの関東に受けたものであります。どうして日本国を思わないということがありましょうか。よつて、先きに立証安国論を造つて、寺社奉行であつた宿屋左衛門の手をへて、日本の政権を当時にぎつておられた、北条時頼殿に奏上したのであります。ところが、文永五年一月十八日、文永六年三月七日、今年九月十七日等々蒙古は牒状を渡して日本国をおびやかしておりますが、これは立正安国論の予言とまったく符合しております。太公望が殷の国に攻めいつたのは文王が礼を厚くしたからであり、張良が秦の国を亡ぼしたのは、漢王の誠を感じたからであります。張良は謀りごとを陣中にめぐらし、太公望は、千里の外に遠征して勝利を得て、兩人とも恩賞を得ております。

さてこのいまだ起らざる以前に、これを知るものを六正の聖臣と申します。(六正とは六種の人臣の守るべき道の中にて、聖臣はその第一位で、形兆あらわれざるに独り存亡得失の要を知つてこれを未然にふせぐをいう。因みに、良臣忠臣智臣貞臣直臣あり)法華経を弘むる者は、諸仏の使者であります。日蓮は法華経、涅槃経等の文を開いて、仏の志をさとり、その上、日本国の将来を考えて、蒙古の襲来を予言して、ほぼそれが的中いたしました。まことに、古しえの賢

人には及ばずとも、後世の人びとにはまれであろうと思います。

積尊の遺訓たる唯一の妙法を知り、この日本国を思うの志は、必ず賞せらるべきでありましように、邪法邪教の人びとが、日蓮を譏奏し謝讒言するによって、永年大忠を抱いて、いまだその望みの一端もとげません。かえって、一昨日、問註所において、不快の見参をいたすことになったのは、現今のこの蒙古来という国難を対治することの容易ならざることを知って、ただただうれうる者であります。

思えば、高山に登らざれば、天の高きことはわからず、深谷に入らざれば、地の厚いことは知ることができません。よって、日蓮が志を知っていたために、再び、立正安国論一卷を呈上いたします。記述の文は、九牛の一毛にて、いまだ、わが志をのべておりません。そもそも貴殿は、現代日本の棟梁と仰がれる方であります。いかでか、国家の良材を損ずることがありましようか。早く御賢察あつて、蒙古来の国難をしりぞくべきであります。世を安んじ、国を安んずるを忠となし、孝となします。これは、ひとえに、日蓮が身のためにこれをのべず、君の為、仏の為、神の為、一切衆生の為に申しあぐるところであります。恐々謹言。

文永八年九月十二日

日蓮 花押

謹上 平左衛門尉殿

以上は一昨日御書の大要である。かく、したため終った聖人は、清書した立正安国論一卷とともに、弟子日興をして問註所に持参せしめたのであつた。

「日昭殿……」聖人は次の間の日照を呼んだ。

ひろくもない草庵のことなので、日昭は、はいと返事をする、聖人の居間の板敷の上に両手をついた。秋の陽はようやく長くなりかけ、庇を通りぬけて聖人の膝のあたりまで達していた。

「只今、日興を問註所に使いに出したが、もはや二度とは、帰るまい」

「日昭もさように思います」

「そうか、では、一昨日来から申しておると、すべて用意はよいか」

「……はい……」

「何故、返事をしづる」

「御聖人様……」

「なんじゃ……」

「日昭はくやしうございます」

「なにをいわれる日昭殿。そんな言葉は若い僧侶がいうことです。日朗より三つも年下の日興

が、私の意中を読みとつてか、黙つて、書状と立正安国論を持つて、問註所に行きました。……私の書状はともかく、再び日蓮が性もこりずに立正安国論を献じたとならば、その弟子たる日興は問註所にとめおかれることは、明白なことを知つても、日興はだまつて出掛けました」

「日興が、問註所にとめおかれるとならば、法華経のため、名譽至極と思ひますが、この日昭は、後陣を受けた手前、只今から、皆の者の頭となつて、逃げねばならんのが残念至極でございます。さだめし後世の人びとが、聖人を草庵に只一人にして、僧俗ともに皆逃げかくれたと申されるのが、五十をすぎたこの日昭にも無念至極でなりません……」

「すべてが、令法久住のためと、日昭殿……ようくお考え下さい。日昭殿が三十三歳、この日蓮が三十二歳の、今から十九年前の建長五年に、日蓮は先陣、日昭は後陣と互に約束をいたした筈「……」御言葉返すは失礼ながら、あの時は、師匠一人弟子一人の時代でございましたが、只今はそれとは異なります。日朗、日興、日向、日頂、日持、日家等の青年僧や三位房、大進房等々の老成あつて、後顧の患はありません。なにとぞこの日昭をこの草庵におおき下さい。そのつもりで、弟子達は、一昨日より御内意を体して、近くは、鎌倉の相越の方々に、あづけるように手配ずみでござります」

「それは御苦労でした。日蓮厚く礼をいいますぞ。今目かおそくとも明日は起る事柄は、先年ここに起つた焼き討ちの時や、弘長元年の伊東配流の時とは事情がまつたく違ふ。あれは文字通り

の不意打ちであったが、今度はすでに問註所によばれておる……」

「今度はいかような処置が有りましたようか」

「おそらく死罪じゃ」

「ええつ、死罪つ、まさか、そんな無法なことが……」

「法華経のためには言葉飾らぬ日蓮、執権職時宗殿の御父上を地獄におちたと申した日蓮、今を時めく、鎌倉の七大寺の僧達の頸を、国難をのぞくためには由比が浜に斬るべしと、二度も三度も諫言した日蓮、おそらく死罪をいい渡そう。軍鼓をたたき喊声をあげて、今にも、この松葉谷をとりかこむであろう」

「事態はそこまで急を要しておりますか」

「日昭殿、蒙古の襲来を十二か年も前に予言した日蓮が、敵が、わが草庵に攻めくるのをわからないでなんとする、先刻、日興に問註所に持参させた手紙には、未萌を知るを聖人というとかいておいたが、どうじゃ。あつははっ〜」

聖人は、草庵の屋根をふるわすような声で笑うのであった。

「ここまで覚悟をした日蓮、日昭殿よろしいか、そうそうあんじて駆けつけた人びとも、さつそくにつれて一刻も早く立ちのきなさい」

「御師匠さまが死罪の御覚悟をなされたのに、弟子一人も庵室におらぬとは、もつての外でござ

います。日蓮が弟子は臆病にては叶うべからずとは、常日頃の御教訓であります。日昭をおいて外の日朗、日向、日持等々の処置は充分ついております。どうか、日昭だけは、聖人の側におおき下さいまし」

「日昭殿。一昨日の夜、しかと、みなの方にいきかせ、そなたが頭となつて退散することを承知したではないか。先刻も申したように、先年の焼討ちは理不尽な念仏門徒の仕業であつたら、これと一戦まじえても理屈はたつた。だが、今度はそうはいかぬ。おそらく、平左衛門尉が総大将となつて数千人の兵をもつて、この草庵をとりかこむであろう。されば、これにてむかえば、みな日蓮と同罪ということになるであろう。それでは、敵の戦法にわれからかかつてゆくも同然である。今度は、手向いせぬのがこちらの戦法。法華経は諸人をたばらかす秘法とは、今日蓮が、示すところじゃ。数千人の人びとをもつて、この麻ごろもの一介の僧日蓮をとりかこんだとあれば、幕府もえらい名誉なことではないか。この辺の道理を、日昭殿がわからぬことはないと思う」

日昭は黙念として、返事がなかつた。

庭の松の樹にやすんでいた山鳩が、一勢にはばたいて、急に舞いあがると、四、五十匹の沢蟹がさあつと、時雨でもきたような音をたてて、庭の面をあたふためいたが、やがて、崖下の穴にむかつて姿を消した。なにか、地の物音をきいたに相違ない。

五

烏帽子胴丸姿の侍が、疾風のごとく、四、五人草庵にとびこんだが、言葉一つも発せず、経机を前にした聖人の背後にまわると、両手をむづとつかんだ。

とその時、庭に、駒の蹄の音がして、ばたばたと人の入り乱れる音がしたかと思うと、

「日蓮、覚悟つ、鎌倉殿の命をうけて、平左衛門尉頼綱、本日只今、召し捕りに参った……それ者ども、伏兵がおるかもしれん、ぬかるな」

馬上から左衛門尉が命令した。

四、五百人もおるかと思われる戦さ姿の侍が、ときの声を上げて、わあつと草庵をとりまいたが、その勢はまことに凄まじいものであった。

四、五人で、六尺有余の聖人を、両手をとって、おさえつけておるところに、左衛門尉の郎従で強力第一と呼ばれる、少輔房というのが、聖人の前につかつかとすすむと、

「諸宗を悪口雑言したる日蓮坊主、よい気味だ。貴様が、日頃の高言からみれば、こうやすやすとは、捕らわれる筈がないのだが、神仏の御加護がきたとみえるが、それでも、まだ諸天の冥加はつきぬというのか、しづとい奴だ。どうしてくれようか」

といいながら、あたりを見まわすと、

「そおれ、謀叛をはかる証拠の品が、ないでもないぞ、さがせさがせ」

後からどやどやと上がりこんだ軍勢を指揮すると、草庵の経机やら道具やらを、足でけちらかし、けっ飛ばしていたが、ふと、聖人が、とっさの間に懐に隠れた経巻をみつけると、

「この坊主、こんなところに、一卷かくすとは、すばやい坊主だ」

少輔房は、聖人の懐から経巻一卷をとりだすが早いか、

「こうしてくれるわ、こうしてくれるわ」

気違いのような声を出すと、聖人の額をめぐけて丁々とたたきつけた。

聖人はしばらく少輔房のたたくにまかせたが、つと右手を払った。その勢いに、今まで聖人を押さえつけていた二人の侍は、あおりをくって、板の間にどおと倒れたが、次の瞬間、聖人の右手には少輔房のもっていた経巻がにぎられていた。

聖人はにつこり笑うと、涙を大きな眼から、ぼろぼろと玉のように流された。この光景には、打った少輔房の方が思わず、はあつと息をのんだのである。

「日蓮坊、なんとした。この少輔房が、打ちちようちやくがそれ程くやしいか」

「貴公が少輔房と申す者か、ようくきけ。今、日蓮が流す涙は、くやし涙などでは毛頭ない。思わず、流した嬉れし涙だ。今、貴公が、日蓮を打った経文こそは、法華経第五の卷勸持品と申す

経文、その経文の中には、末法において法華経を弘むる者、必ず多くの人びとより悪口雑言され、刀や杖をもってきられたたかれる、だが、まさに忍ぶべしと仏の予言が書かれた経文であるのだ。ああ、ありがたし、ありがたし」

「たわけたことをぬかす坊主だ。そうれ、日蓮坊主が、それ程ありがたいという経文を、破いてしまえ、罰なぞあたるものか、そうれ……」

掛声に応じて、草庵一杯にふみこんだ左衛門尉の家来は、聖人、秘蔵の経文を土足にかけるもの、破るもの、おどけて尻にあてるもの、鼻をかむもの、まさに狂気のさたであった。

右手に五の巻勸持品をしっかり握った聖人は、すつくと立上ると、草庵の廊下に出てこられて、馬上の左衛門尉をはつたと睨まれた。

聖人を背後で押さえつけておつた家来も、聖人のなすがままに、聖人の背後についてくるのみであったが、庭における郎党は、それつというつと、刀を聖人の前につらねて、左衛門尉と聖人の間にたちふさがつたが、臆する色もなく聖人は、廊下よりいい放つた。

「左衛門尉ようくきけ。日蓮は、日本国の棟梁、日本国の日月、日本国の眼目なるぞ、汝が一族郎党のわが草庵にうち狂うさまをみよ。汝の所為は、日本国の柱を倒す行いとはわからぬか、近年打ちつづく天変地妖も、飢饉疫病もみな、法華経にそむく誇法の罪過とはまだわからぬか。不憫な奴、日本国の柱たるこの日蓮を倒すならば、眼前に自界叛逆して、北条一門に同志討ちが起

るであろう。他国侵逼難として、蒙古国は必ず日本国を攻め、この日本国の人びとは討ち殺され、あるいは、いけどりになるであろう。これらは、日蓮が、立正安国論にくわしく申し述べたところであるが、左衛門尉には合点がゆかぬか、…鎌倉幕府が帰依するところの、建長寺、寿福寺、極楽寺、大仏殿、長楽寺等の、一切の念仏禅宗真言律等の寺塔を焼きはらい、僧の頸を鎌倉の由比が浜に斬るべし。しからずんば、日本は必ず亡ぶと日蓮は断言する。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

聖人の大音声に、さすがの兵卒も驚いてしずまれば、左衛門尉が乗る馬のみが、大きくいなないて胴ぶるいをするばかりであった。

聖人が逮捕せられたのは、九月十二日の午後六時頃であった。武蔵守宣時の屋敷に一時あずけとなつたので、聖人の処分は佐渡に流罪ということに一応は決定したわけである。武蔵守宣時の領地が、佐渡であるからそう推量が出来たのである。聖人の身を案ずる門下の者は、ちよつと安堵はしたが、予断は許されないもので、いろいろと手づるを求めてその後のなりゆきを見守つていた。

ところが、午後八時頃になると、裸馬に乗せられた聖人が、嚴重に警戒されて、宣時の屋敷

の門を出たのである。この総取締は、依然として平左衛門尉頼綱であった。まことに一国を相手にして謀叛をした者をしばったような威かめしさであった。

聖人の前々からの命令によつて、聖人の門下とはつきりわかるものは、この行列の周囲には姿はみえなかつたが、身をやつし、通行人をよそおつて、多くの人が聖人を見守つていた。それにもまして多いのは、念仏、禅、真言、律等々の諸宗の人びとであった。それは、門口に立つて、聖人を罵ることはもちろん、中には石を飛ばし、わらじのきれ端を、馬上の聖人めがけて投げつけるものさえあつた。普通の捕われ人にさえ、遠慮することが、平氣で行なわれ、これを制止する警護の人もないという有様であつた。

そして、聖人の行列よりも早く、竜の口で日蓮坊斬首という噂がとんでいた。佐渡に流罪される罪人が、夜に入つて屋敷から連れだされる筈がないのである。聖人があずけられた屋敷の主人、北条宣時は、極楽寺良観の大信者であること、平左衛門尉とはごく親しい仲であること、だから、佐渡に流罪とふれながら、斬首するに違いないと鎌倉の町の人びとが判断したのであつた。それにも増して、鎌倉の町の人びとが予想した日蓮坊斬首の根拠は、聖人の言葉にあつた。鎌倉の諸宗の寺々を焼き、諸宗の僧侶の首をはねよと、日蓮坊はいったそうだから、捕われたならば、日蓮坊こそ斬首せねばならんという噂であつた。

行列が若宮小路にさしかかつて、鎌倉八幡宮の下馬橋の前に来た時である。

聖人は、すばやく馬から飛びおりられた。わあつという驚きと叫び声が、警護の兵卒や見物人の口から出たが、聖人は両手をあげて周囲の人びとを制止すると、

「各々方、お騒ぎあるな、日蓮、八幡大菩薩に最後に申すことがあるによつて、下馬したまで、しばらく猶予をお願いする」

こう言いながら聖人は、下馬橋の中央に進んで、すつくとたつと、

「八幡大菩薩はまことの神か、昔和氣の清麿が頸をはねられんとした時は、長け一丈の月となつて現われ、伝教大師が法華経を講ぜし時は、紫の袈裟を御布施として、さづけさせ給うたと伝えきいておる。しかるに、今、日蓮は、日本第一の法華経の行者である。しかも、身には一分のあやまりもなく、日本国の一切衆生の法華経を誹謗して、無間地獄におち行くを、助けんがために申す法門である。また、大蒙古国より、この日本国を攻めるならば、天照太神、正八幡とても安穩におわすことはよもあるまいと思う。その上、釈迦仏が法華経を説き給ひし時、多宝仏、十方の諸仏諸菩薩あつまつて、日と日と、月と月と、星と星と、鏡と鏡と、あいならべたるがごとくなりし時、無量の諸天ならびに、天竺、漢土、日本国等等の善神、聖人あつまりし時、各々、法華経の行者におろかなるまじき由の、誓状を出せと仏よりせめられて、一同誓状を立てられたが、八幡大菩薩もその中の一人たることは、日蓮が申すまでもないことである、いそぎいそいで、その誓状の宿願をとげさせ給うべきに、いかに、このところに姿を現わさぬは、不思議千

万……」

下馬橋の中央に立った聖人を、折から九月十二日の月の色もさえて、くつきりと浮び上らせ、いかにも、聖人の姿から月の光が出るかと思われる程に、神々しかった。聖人は、最後に再び声を大にして叫ばれた。

「日蓮今夜、頸をきられて、靈山浄土へまいるならば、まず天照太神、正八幡こそは、起請を用いぬ神にて候と、教主釈尊にはつきりと申し上げますぞ……」

六

「お婆ちゃん、大変だよ、南無妙法蓮華経のお坊さんが……」

「どうしたなあ」

「裸馬に乗せられて通るよ……お侍がうんとついて……」

「ええっ……それでは、御上人さまが、いつもいつてることが、本当になったのかもしれないぞ」

「坊よ……そこからお盆をとってくれ」

鎌倉の小町の町はずれの裏通りの家で、お婆さんは、ぼた餅をつくっていた。

「そうれ、坊よ、お前にもぼた餅をやるう」

婆さんは、あわてて、出来たてのぼた餅をお盆に四つ五ついれると、たすきをはずしながら家をとびでて、小町の往来にいそぐのであった。

往来は、がやがやといいながら人が立っていて、すぐとは近づくことが出来なかった。おりから月夜のことなので、さほど暗くはないのに、はなばなしくたいまつをたいて胴丸姿の侍が、無言のままにのしのしと歩いていく。

裸馬に乗った聖人が、老婆の前に来た。

「お聖人さま……」

老婆の声に、馬が先ずびつたりととまってしまった。手綱をとったものが、あわてて引いたが、それは無駄であった。馬が動かないのである。

聖人は馬を愛し、馬のために一文を草しておる程の方である。馬が、聖人の心持をみぬいて、動かなかつたのであるう。

したがって、行列はとまってしまった。

「お上人さま、おいたわしうございます。これはこの婆が、只今こしらえたぼた餅でございます。どうぞ召し上って下さいまし」

広くもない往来である。お婆さんは、聖人の馬のそばによると、お盆のぼた餅を高くさし上げ

るのであった。

お婆さんの眼には、聖人の姿は、生きてゐる仏さまのようにみえた。今捕われて刑場に行く罪人とは少しも見えなかつた。人のえらさは、その得意の時でなく、悲運の時に發揮するものである。聖人にはっこり微笑されると

「御老婆、法華經には、子供が砂のまんじゅうを仏さまに捧げて、大變な功德を得たと書かれてあるが、あんたのは、本当のまんじゅうじゃ……」

「お聖人さま、まんじゅうではありません。これは婆のこしらえた、ぼた餅でございます。一つ、つまんで下さい……」

「そうそう。本当のぼた餅だ。今この末法の法華經の行者にぼた餅を供養なさるうとする。その功德ははかりしられぬものがあります。日蓮はその志ありがとうございました」

「では、どうか……」

老婆は盆のぼた餅を頭上にささげた。

「御老婆、ありがたいその志は、帰りにお受けいたします」

「ええつ、帰りつ。とらわれの身となつて、この鎌倉では帰つてきた人はございません。そんなことをいわず、婆の供養をお受け下さい」

「その不思議は、御老婆、あの中天にかがやく、今宵の月天子が知つておるであろう、安心せら

れよ」

聖人が月を馬上から指させば、警護の侍も、見物の人も老婆も等しく、九月十二日の月をみあげるのであった。

警護の侍は一言も発しない。馬が聖人の心を知って、ひとりでに動き出した。行列も動きだした。老婆だけが、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱えながら、聖人のうしろ姿に、ぼた餅を依然として捧げていたのである。

松林をぬけると、潮鳴りの音が、まっていましたとばかりになり出した。

由比が浜を左にみて、聖人の裸馬はあるいていた。これは不思議な行列であった。警護する人びとが、そのいかめしい恰好にもせず、なにか悪いことでもしているような様子であり、罪人であるべき人が、かえって馬上に毅然としておるといふ行列であった。

星は一つもなく、月だけが皎々とかがやいて、由比が浜の波頭がいよいよ白かった。

稲瀬川を渡って、鎌倉権五郎をまつる御霊神社の近くに、聖人の乗る馬が近づいた時だった。

「お聖人さま……」

「……お聖人さま」

と言う四、五人の音が、近づいてきた。

すわこそ、謀叛人に加担するものが聖人を助け出す騒ぎかと思つたが、それは従者を従えた立

派な四人の侍で、語勢に似合わず、態度、物腰しには、なんらの不穩な形勢はなかつた。

警護の人びとも、これこそ、日蓮の信者として有名な四条金吾の四兄弟であろうと、察しがついた。なぜならば、この近くに、四条金吾の屋敷があつたからである。

四条金吾頼基は、江馬光時の家臣で、四人兄弟で江馬家に仕えておつた。兄弟は金吾頼基、左衛門尉頼隆、四郎頼季、七郎頼美である。

この時は兄弟四人共々に信心をはげんでおつたので聖人の法難に気も転倒してかけつけたのであつた。

兄弟四人が、わかれて二人づつで、聖人の裸馬をとりかこんだ。

わあつという、男の泣き声である。

聖人警護の人びとも、思わず顔をそむける程の泣き声であつた。聖人を見上げる兄弟四人の顔には、涙が月の光をすつて小川のごとく光つて流れていた。

「不覚なり四条兄弟……」

聖人は馬上から、四人にいい放つた。

「これ程の喜びが、信心をしていてわからん筈がない。日蓮が日頃月頃願つておつた思いが適うのは今宵である。この娑婆世界では、雉と生まれては鷹につかまれ、鼠となつては猫に食われ、あるいは妻のために、子のために、敵のために、身を失うことは、大地微塵よりも多いのであ

る。法華經の御ためには、なんびとも、只の一度も命を失ったことがない。しかるに、日蓮は、今夜頸きられに行くところである。日蓮は貧道の身と生れて、父母の孝養も心にまかせず、国恩に報ゆるの力もなかった。

されば、今度、この首を法華經に奉って、その功德を父母に回向し、そのあまりを、弟子檀那等にはぶくべし……」

聖人の言葉を、四条金吾始め兄弟達は、馬の口にとりすがって、涙のうちに耳をかたむけていたが、金吾が答えた。

「御聖人！ この四条金吾頼基は、聖人の御最後をみとどけましたならば、必ず、追い腹きつて、靈山浄土にお伴をいたします」

「それは、ならぬぞ。きつと戒めます」

「……いや、金吾だけは、お伴をいたさせてもらいます……」

馬が動きはじめた。

「お伴をいたします……お伴をいたします……」

四条金吾は、悲痛な言葉を叫びながら聖人の馬を追った。みれば、この兄弟四人とも、はだしであるのが、とてもいたましかった。

やがて、刑場の竜の口に近づいた。治承四年石橋山の戦いで、源頼朝は大庭景親に負けたが、

三か月後の十月には、景親を竜の口に斬首して、片瀬川のほとりに梟首したことがあるが、その時代から、竜の口は刑死梟首の場所となっていたのである。聖人の外に、建治元年には、蒙古の使者杜世忠等五人を、竜の口に斬首したことは有名な話である。

筆者がゆく信州霊泉寺温泉の入り口に、竜の口という地名があるので、不思議に思ってしまったところ、竜の口という地名があっても不思議ではなかった。昔は水の落口を竜の口といったのである。相州の竜の口は、片瀬川が海に入るところだから竜の口というのである。辞典によると、竜の口は辰之口とも書く。東京都麹町区（今の千代田区の旧地名）または江戸城西丸下の和田倉門にあり、城の濠の水が、道三堀への落口を竜の口ともいう、現在その辺は、まったく埋め立てられて、丸の内一丁目と称して、銀行集会所等がたてられてある、とあるが、丸の内一丁目を通って、竜の口と思う人は今あるまい。先年細井総監（現御法主日達上人貌下）が奉安殿前の手洗に御寄進した、銅製の竜の口より水の出るのも、やはり竜の口という、もつとさがると、とよの口の水の流れ出るところを竜の口というそうである。霊泉寺温泉の入口の竜の口というのは、西内川が依田川にそそぐところなので、そこは今でも、竜の口といっている。風呂屋などにあるのは小さいので蛇口というのである。近頃カラン給水器と洗湯でいうのは英語のクレインがカランと日本語になったので、原語の意味はでっばっているという意味で、これは竜の口とは少しも関係がないのを断っておく。

ついでにくるべき刑場、竜の口に聖人は到着した。合図に従つて、前面の片瀬の浜のみを残して、侍が点々と半円をえがいてちり、たちまちに人の矢来垣ができた。今までたった一人を護送するには、大げさな人数だと思つたのが、この刑場にきてきてこそとうなずけた。

かがり火が赤々とたかれ、たいまつも新たに点じられた。聖人は幔幕を背後にして、四、五人の家来を従えて、豪然として床几に腰掛けた、平の左衛門尉の前に立たされた。

「御検使の御言葉を……」

聖人につきそつた侍が声をかけたが、頼綱は、無言で四、五間離れた砂の上に、ぽつんとおかれた荒筵の方を顎で示しただけであつた。この期に及んで、いう言葉はないという意味であつたろう。

七

聖人が一週間後に、四条金吾に手紙を書いてこの時の心境を語っておるが、その中の一節に、「娑婆世界の中には日本国、日本国の中には相模の国、相模の国の中には片瀬、片瀬の中には竜の口に、日蓮が命をとどめおく事は、法華経の御故なれば、寂光土ともいふべきか」（全集一一三三ページ）とある。

今聖人はその片瀬の竜の口の首の座にすわるのである。日蓮が難に逢う所ごとに、仏土なるべしといわれたが、それは現実には砂の上におかれた一枚の荒筵であつた。夜もふけて露をふくんだ筵は、おりからの十二日の月の光を吸いこんで、白銀の蓮台座のごとくに、片瀬の砂浜に光つていたのである。

聖人は筵に向かつて、四、五歩あるかれた。これを見守る群集が、胴丸姿の警固の侍の背後にひしめいていた。

聖人が歩をすすめると、同時に、

南無妙法蓮華経……………

南無妙法蓮華経……………

南無妙法蓮華経……………

と御題目の聲が一勢に上りはじめた。警固の侍があわてて制止したが、それも束の間で一段と聲が大きくなり、やがては、片瀬の浜の波音よりも音高い題目の声となっていた。みれば四条兄弟の四人は、土分の故に、警護の侍から黙許されたのであろう警護の内側に、聖人の御最後を見とどけたならば見事に追腹をかこうとして、肅然として座っているのである。

聖人が筵の上に着座したと思われる頃、月が雲にかくれたか、山に入ったか、片瀬の浜は急にあたりが弁せぬ闇にとざされてしまった。

ただ篝火だけが浜風にあおられながら燃えさかり、題目の声はいよいよ高くなっていた。

聖人の背後にまわった太刀執りは、太刀を持ったまま、聖人に声をかけた。

「日蓮御房、只今が最後でございませぬぞ。身どもは不思議な縁をもつて、太刀執りの役を仰せつかつて御房の首を斬らねばならぬが、まことに残念至極でござる。きけば、念仏を非難なさるとあるが、念仏も仏の説に違いない。僧侶が仏説を非難することは、近頃きこえぬことと思いません。いかがであろう、念仏の悪口をいわぬといえませぬか、題目とやらをすてると、この場でいませぬか……いかが……」

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」

これが、聖人の返事であった。

「では……これまで……念仏の敵覚悟！」

太刀執りは思いきつて、刀をふりおとした。大きな岩に、刀をふりおろしたような気がした。グワっといったかと思うと、手許がしびれて思わず太刀を放し、急に眼がくらんであつという声とともに、どうと砂地に倒れて、気を失ってしまったのである。

群集のみたものは何であつたらうか。

太刀執りが、聖人の背後にまわつて太刀をすつくと構えたが、しばらく聖人をながめて躊躇したようであるが、やがて、刀をふりかぶった時である。江の島の方から、月のような光りものが

真直ぐに刑場の上をとんで、西北に走りきつたが、四辺は真昼のごとく瞬間明るくなり、群集は光りに眼がくらんで思わず声を上げて、ばたばたと砂地にぶつたおれてしまったのである。ここで一番おかしかつたのは本日の検使役であり、常平生豪雄をもつてなる平左衛尉頼綱が、自分をめがけてとんできた火の球に恐れをなして、一町ばかりも逃げ去つたことであつた。大將が逃げだしたのだから、家来が逃げだすのは無理もない。ふつとばされたように家来も逃げた。大將が一町程逃げたのだから、家来は二町程も逃げたわけである。

刑場に毅然として、残るのは聖人ただ一人であつた。

刑場から逃げださなかつたのは、四条四兄弟を始め、聖人の門下の人びとと、ひそかに同情をよせる人びとのみであつた。

みれば聖人は依然として端座されておる。砂上に倒れておるのは太刀執りの役人であつた。首斬られる人が倒れず、首斬る人が倒れておるといふ、前代未聞の光景であつた。

聖人は声をあげて叫んだ。

「いかに、殿ばら、かかる大禍ある召人をおいて、遠のくか。近く打ちよれ打ちよれ日蓮が頸をきるならば、いそぎ斬るべし、夜明けなば、みぐるし……」

誰一人とて、返事をする者もなかつた。思い出したように四条金吾の唱題に和して門下の人達が、御題目を唱え出した。



月はみえなくなつたが、東の水平線には夜明けのしるしをつけて、黎明がおとずれていた。

日蓮聖人の信者は、聖人の首が、竜の口で落ちなかつたことを自慢するが、聖人は自ら「日蓮といひし者は、去る年九月十二日子丑の時に頸をはねられぬ。これは魂魄佐渡の国に至る」といわれておる。佐渡に至つた魂魄はこれ凡夫の魂魄ではなくて、末法本仏の魂魄なりとわれわれは拝察しなければならない。

竜口法難については、重野安繹なる帝大の史料編纂官が、事実無根として、明治二十三年五月十日学士会館にて「なるほど日蓮上人の仏力にて、刀の摧折せしは結構の次第にて、該宗の爲には、喜ばしき訳がらなれば、生存し置き度は山々の志願なれど、日本刑法との権衡上抹殺せざる可からざるは、又止むを得ざるなり」との趣旨で演説を行い、日蓮門下に波紋をなげたことがあるが、今から考えれば、研究不足の論難で、あえて紹介の必要もないが、当時は相当問題にされたようである。このいきさつは、大正四年発行の、田中智学著「竜口法難論」にくわしく述べられておる。また「竜口法難は確乎たる歴史上の事実なり」と題して、山川智応著「日蓮聖人の研究」（昭和六年版）があるのでそれ等にゆずるが、ここに一つ筆者がいいたいことがある。それは、聖人が種々御振舞御書に書かれた「江の島のかたより、月のごとくひかりたる物、鞠のようにて辰巳（東南）のかたより、戌亥（西北）のかたへひかりわたる」という、このひかりたる物の解釈である。この解釈がつかないために、ついには竜口法難そのものまでも否定するようにな

つたのではないかと思うことがある。

このひかりものの解釈さえつけば、註画讚にいうところの「依智の三郎左衛門尉直重、頭をはねんとしてその刀折れて地におつ」も高祖年譜にいうところの「依智直重刀をとつて大士を斬らんとするとところ依然として刀折れる」の解釈もつくのであるが、御遺文のひかりたる物の解釈がつかないために、どうも、註画讚や高祖年譜も全然否定する聖人の伝記作者がときどきあるのである。今でいうインテリの作者ほど、このひかりものことにふれないで、伝記を書いておる。あるいは勇敢にこの項を否定しておる聖人の伝記作者もおる。これは明治時代から大正、昭和にかけての、聖人の伝記作者に多く、一応科学的に聖人伝を書くこうとする作者は、このひかりものを否定しておる。

ところが、最近では、聖人が竜の口で経験したような自然現象があるということがわかってきた。この現象は雷電現象という現象であつて、数年前に北海道でこういう現象があつたのであるが、その時の解釈が面白い。こういう自然現象のあることがわかつて、その昔、鎌倉時代に僧日蓮が経験したのが、この雷電現象であるというて、その時の科学者は、聖人の御遺文を引用しておつたのである。僧侶の方では、非科学的であると解釈して、引用を遠慮しておるのに、科学者の方で、堂々と御遺文を引用しておるのも面白い。

さて右のことが古いというならばもつと新しい事実がある。それを左に引用する。

これは、昭和三十四年八月二十日、毎日新聞にのつた記事である。

「十八日午後十一時ごろ、雷雨のあがつたまっ黒い空を、丸い物体が二つ黄色い光を発して、東から西へとんだと十九日午後川崎市の佐藤正信さんから、気象庁に電話があつた。

二つの光はタテに並び、黄色がかつたダイヤ色で、飛行機と同じくらの速さで、シュルシュルというジェット機音を遠くできくような音がしたそうだ。都内各署と川崎市中原、高津両署で調べたところでは、ほかにみた人はいないらしいが気象庁測候課では「雷雨の最中やその直後、雷光で熱せられた空気が、まわりの冷たい空気と、つり合つたまま移動する『球電現象』ではないか」といつておる。ここでは球電現象といつておるが、前述の雷電現象といふのは、これと少しことなつて、雷のかたまりみたいなもので、それが球状になつて飛ぶことをいふのである。

以上のように聖人のいわれたところの「月のごとくひかりたる物」の解釈がつくならば、太刀執りが、倒れ臥すのも、刀が折れるのも当然なことである。雷電現象という電気現象の中で、つたつておるといふ姿勢でしかも刀を持つて立つておるのだから、感電するのは当然である。刀がおれたので、太刀執りは、めくらみ倒れ臥すということになり、感電死はしなかつたのである。このように解釈が出来れば、今後は、当然、聖人の伝記には、この雷電現象たる、「月のごとくひかりたる物」をとりあつかわねばならぬといいたいのである。

鎌倉八幡宮の下馬橋は、今は石の太鼓橋であるが、聖人の時代には、朱塗の橋で赤橋といわれていたというが、橋の前面は若宮小路で、左右に通ずる往来を横大路という、宮に向かって、右のつきあたりには執権職の屋敷があった。

時は、聖人が竜の口にひかれた文永八年九月十二日の夜、時刻は、真夜中ちかく、聖人の処刑執行以前であった。

北条時宗の対面所の庭先に、黒装束の男が一人うずくまっていた。縁側に立つたまま話をきいておるのは時宗である。

「京においては、上皇方や天皇さまにおいては、蒙古に対しての、鎌倉方のとる態度に不満のようであります。鎌倉方のように強硬一点ばりの外交は、外交ではない。かえって、蒙古国を刺戟するばかりで、害あつて利益なしといっております。しかも、六波羅さまもこれに御賛成の模様であります」

「兄者もか……」

「時輔さまは、外交上の定見という意味ではなく、鎌倉方に反対して、殿を窮地に陥しいれば

よいための、御意見と思われませう」

「うむ……ご苦勞……」

黒装束の男が消えると、また一人庭先に、同じような黒装束の男が現われた。

「名越の北条様の御様子をお伝えませう」

「うむ……」

名越の北条というのは時章、教時のことで、時宗の叔父の子供で、甥になる。前述の六波羅の時輔は、時宗にとつては腹ちがいの兄であつた。

「名越家には、六波羅の使者が、度々参つております。またたしかに、名越よりも京都に使者を出しております。御命令があれば殺めて、使者の密書、手に入れることも出来ますが、いかが……」

「まだ、その時機ではない。泳がせておいたがよいであらう……」

「時章、教時さまの御兄弟は、たしかに、京都と氣脈を通じて、万一、時輔さま御謀叛の折は、鎌倉において軍兵を動かす所存とみえます。武器の蔵を調査しました。事を蒙古の來襲によせ、せつせと兵器をたくわえておる様子、ここに員數表がございます」

時宗は、なにやら書いた紙片を受けとつた。

「ご苦勞……」

声と共に男の姿が失せると、どこからきたか次の黒装束が頭を下げていた。言葉の調子だけが、前の黒装束と違って、臆するところがなかった。よほど時宗から信任を受けておるとみえた。

「殿つ、手前の役目は、なかなか大任でございます。一人は、人もあろうに、殿の奥方様の御父上、安達泰盛さま、一人は、只今北条家の家臣の筆頭で、御家令の役をなさる平左衛門尉頼綱さま、どちらも、殿の前では、悪口を申し上げることを謹まねばならぬ御方様の、悪口を申し上げる役目が、私でございます。むずかしいございます。恩賞の点では、私が密偵のうちでは、一番と思し召せ……」

「わかつておる、恩賞には一国を取らせるぞ、よいじゃろう」

「どういたしましたして、一国をやるぞといつて、九州あたりに、追いやられたのではたまりません。この鎌倉から一步も出たくありません。これが、近頃の守護職地頭職みんなの考えでございます」

「よけいなことはもうよい。して、探索の結果はいかがじゃ」

「はい……実は……」

——この黒装束の男の話を理解する為に、次の話を先にしなければならぬ。

時宗の側近には二人の重臣がいて、その勢力を争っていた。一人は今夜竜の口で、聖人を斬首

しようとしている平左衛門尉帆綱である。彼は北条家の家令として、表面上の事務一切を扱っていた。彼は俗に御内さまといわれて、北条家の家臣の統領であった。彼は北条家一門の勢力をかためるのが、彼の役目であったから、いろいろと理由をこしらえて、外様の者から守護職や地頭職をとりあげて、北条一門に適当に分配してやるとともに、自分の勢力を増大させていたのである。これは後の話になるが、元弘元年には、日本国中の守護職は九割までも、北条一門で占めるという工作に頼綱は成功した。この北条氏の勢力を増大して、北条一門を統合しようと念願する頼綱に向かって、立正安国論を提示して、北条一門に必ず同志討ち、すなわち自界叛逆の難が起ると、聖人が喝破したのであるから、頼綱の怒りは想像以上であり、自ら聖人斬首の検使役を進んで引き受け、また自ら召し取りの総大将となったこともうなずけるのである。

時宗の側近にもう一人の勢力者があつた。それは時宗の義父にあたる安達泰盛という人物である。安達氏は代々北条氏と姻戚関係を結び、北条氏の隆盛とともに、自分もその勢力をのばしてきていた。現に泰盛の娘は時宗の奥方であつた。頼綱が御内さまという北条家の家臣の筆頭なら、彼は外様の筆頭で、名望とともに財力もあつた。彼は今日も高野山に残る里程標を建てたり、高野版という印刷経典を刊行する程の富者であつた。また評定衆や恩賞奉行を兼職し上野国の守護職でもあつた。故に頼綱が、北条一門で日本国中をかためて、北条氏の専制力を増大しようとするれば、泰盛はこれとは全然反対で、外様といわれる御家人を保護する立場をとって、政治

の上では、北条氏の専断を排して、北条政權樹立当時、すなわち義時、泰時の時代の合議体制を重んじていたのである。このような反対の立場を保持する二人の重臣が、今年二十一歳の時宗を中心にして争っていた。時宗としても、たえず、両者の動向を注意していなければならなかった。文永五年に第一回の蒙古の国書がきて、日本中大騒ぎを演じて、時宗は関東や関西の特に沿海の御家人や守護職に「蒙古人凶心をさしはさみ、本朝を伺うべきの由、近日牒使を進らせるところなり、早く用心せしむべきの旨、仰せによつて執達すること件の如し」と出して見たが、関西や九州の守護職で、鎌倉や関東の居住地にすみついて、任地に行かないものが多かったのである。これは関東における頼綱と泰盛との勢力争いのためであつて、任地に赴くことが、両者勢力の均衡を破ることになるので、時宗としても、余程注意をしなければならなかつた。だから、第一回の蒙古襲来の時には、ほとんど九州、四国の前々からの守護職、御家人が活躍して、関東の軍勢が活躍しなかつたのは前記の理由によるものである。蒙古は文永五年に使節を送つても日本から返書がこないのので、本当に使節が日本までいったかどうかを調査するために再び使者を派遣した。すなわち文永六年三月七日に、太宰府から京都に、蒙古の使者対馬来島の報知があつた。使節の一行は蒙古の使八人、高麗使四人、従者七十余人というのである。この第二回の使者の来朝については、朝廷においては、評議の結果、返牒を送るよう決定したのだが、鎌倉の意見に従つて、やはり返牒は送らないことにきめた。そこで、蒙古は第三回の使者を出した。蒙古はウル

ダイが使者となり、高麗ではキンユウセイ・コウヂュが使者となって対馬の伊奈浦に到着し、蒙古の中書省の牒状をもってきたのである。九月二十四日太宰府の守護職から、京都の朝廷に奉った。朝廷では、評議を行って、菅原長成をして返牒をつくらせて、これを幕府に下したが、時宗は断然返牒の必要がないとして、前回同様蒙古の使者に返答をあたえなかった。蒙古の使者は第二回、第三回ともに対馬まできて、太宰府にはこなかった。事態はこのように漸次悪化していつて、九州や長門辺の防備を嚴重にせねばならなかったにもかかわらず、任命された守護職や御家人が、時宗の命に従ってなかなか動かなかつたのは、頼綱と泰盛との勢力争いの結果であつたのである。

これは十四年後のことであるが時宗在世中は、この二人の重臣を押さえてことなきを得たが、時宗の死後一年目には、ついに頼綱が泰盛を討つて亡ぼしてしまつた。この時、泰盛に加担して殺された外様の豪族には、信濃国伴野小笠原氏、三河国足助氏、安芸国小早川氏、近江国佐々木氏、常陸国加志村氏等々があつたことを知れば、泰盛が生存中、いかに権力を保持していたかが伺われるのである。ただし頼綱のちに、時宗の子供で泰盛の孫にあたる貞時によつて殺されておるのも皮肉であつた。

第三の黒装束の男が、最近の泰盛と頼綱の動勢をつたえて煙のごとく消えた時、第四の黒装束の男が、時宗の前に現われていた。

「太郎か……」

「はい……」

「太宰府からの情報か……」

「はい。蒙古国は第四回の使者を送つて参りました。二回目三回目の使者が、対馬まできて引き返しておるのに腹をたててか、今度は強力な使者をたてて参つたようです。趙良弼というのが使者の名でございます」

「五、六日前にその情報はあつた、か、詳細が知りたかつたのだ。して……」

「蒙古国王は趙良弼に三千人の護衛兵をつけようといわれたが、良弼はこれを断つて、文官二十四名をつれて、本年（文永八年）正月十二日に高麗に到着した由であります。良弼は蒙古人ではなく、蒙古に征服された女真すなわち満州人でございます。大変年をとつておりますので、蒙古国王が使者とすることを許さなかつたところ、「絶対に死すといえどもうらむところなし」といつて、自らすすんで、日本への使節たることを願つた程の人物であります。よもや二回目、三回目の使節のごとく、対馬まできて、すぐ帰えることはありませんまい。本日は九月十二日……」

「太郎、あの月のぐあいでは十三日といわねばなるまい」

時宗が訂正すると、太郎はつづけた。

「対馬からの早船では、今度は趙良弼は対馬によらず、直接筑前太宰府をめざしておる模様で七日前の九月六日、金州を発船したと申します。すると、到着は十八日か十九日の様子でございます……」

「うむ、性こりなくまたもやつてくるか」

「さよう必ず太宰府にやつて参ります。しかも、殿、蒙古国は、趙良弼が、必ず日本国に行くことを期するために、クリンチ・コウダキュ・オウコクシヨウの諸将に蒙古兵を引率させて、海上より金州にこの三月に到着しております。蒙古兵は鋤鍬を持って、金州に屯田して、趙良弼が日本より返書をもつて帰ってくるまで、待機するとともに、高麗の国を威嚇しておる模様と伝えております……」

「苦勞……」

時宗のご苦勞の一言は、さがれというのと同じなのであろう。たちまちに男の姿はなくなつた。

「申し上げます」

第五の男の声である。

「次郎めか……」

「さようで……」

「いかがじゃ……」

「関東一円を、縦横無尽にかけめぐって密偵いたしました。今度、元軍が万が一にも襲来しましたならば、九州に軍勢を送り、自身も赴こうとする気概と忠義の者は只今のところでは、武蔵の小代氏と、鎌倉の二階堂氏にござります」

「しかとさようか……」

「はいっ」

「只今でも、下知状を出してよいな」

「御意っ」

「御苦労っ」

男が下がった。時宗は部屋の奥に向かって、声をかけた。

「誰かおらぬか」

声と同時に、廊下に人影がして、両手をついていた。

「おうっ。たった今、日蓮の斬首をとりやめたと、平左衛門につげよっ」

「何故でございますか」

「理由は後で申す。いそげ、間に合わぬと坊主の首がおちるぞ」

「蒙古人襲来すべき由、そのきこえあるの間、御家人等を鎮西に下しつかわすところなり、早速器用の代官を、薩摩国阿多北方に差し下し、守護人に相伴われ、且は異国の防禦をいたさしめ、且は領内の悪党をしすむべし。仰せによって執達如件。

文永八年九月十三日

北条時宗 花押

北条政村 花押

右は薩摩国阿多北方の地頭職で、相模国が本領である二階堂氏にあてた下知状で、日附も九月十三日、聖人の竜の口処刑の日であった。武蔵の国の住人小代氏にも、さつそく自身肥後国に下向すべしとして、前文と同様な下知が同日の日附で出されておる。

時宗は十二日の真夜中から十三日にかけて自身がきいた元使趙良弼の来朝は、もはや動かすことの出来ぬ事実であることを知ると、蒙古の襲来を上げて命をかけておる聖人をむざむざ殺すことが、青年宰相らしい正義感から到底出来なかつたと思われる。幸にして、時宗のこの夜の使者は間に合つて、竜の口に聖人はことなきを得たのである。

蒙古の使節趙良弼は、聖人の竜の口の難から七日目の九月十九日に、筑前国今津に上陸したのである。